

ひたちなか 埋文だより 36



十五郎穴横穴墓群の調査

十五郎穴横穴墓群では、現在、遺跡の範囲や横穴墓の分布の調査

を実施しています。その調査中に、茨城県の指定史跡となっている館出支群において未開口の横穴墓を確認しました。横穴墓の入口部分の土を除くと、そこからは大量の須恵器が出土しました。須恵器は杯や高杯、蓋、盤などの器種で、接合した結果 57 個体ありました。これほど多くの土器が横穴墓から出土するのは大変希な例です。これらの土器は、食器類であることから、お墓の前で行われた「オマツリ」に使用されたものと考えられます。

(2011.11.24)

CONTENTS

速報！十五郎穴横穴墓群の調査 — 未開口の横穴墓 館出第 35 号墓 —

第9回企画展 横穴墓の世界／公開講座「ひたちなか市の考古学」第5回

「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」 第8回 勝田市の遺跡の調査(1) (川崎純徳)

展示資料紹介 「武田式」と「小祝式」、それぞれの紡錘車 (鈴木素行)

横穴墓を歩く⑦ 大塚辺田・木滝横穴墓群(糸川 崇) ひたちなか市内の発掘調査 2011

1ケース・ミュージアム 22 霞ヶ浦の製塩土器 ひたちなか市の遺跡⑨ 大島・田彦中学区編

歴史の小窓⑧ 塩をつくった土器 虎塚古墳花便り⑧ コブシ ほか

穴墓群の調査

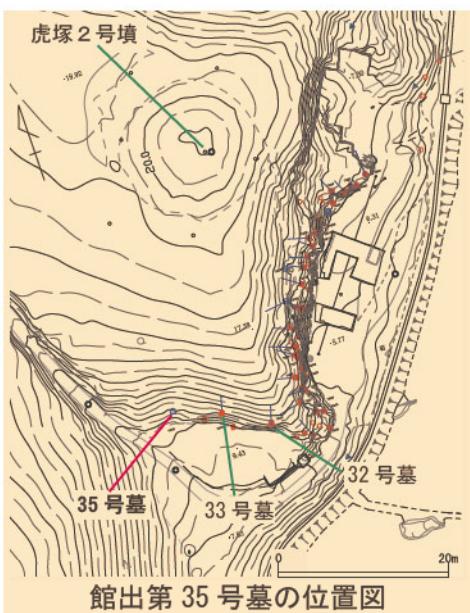
館出第35号墓一



2010年度の試掘調査で未開口の状態で確認された館出第35号墓については、2011年10月より発掘調査を実施しました。その結果、十五郎穴横穴墓群を知る上で大変重要な成果がありました。この写真は、横穴墓内の玄室部の状態です。ここからは、人骨・大刀・刀子・鉄鎌・鉄釘・土器などが出土しました。人骨は、少なくとも頭骨だけで7体分あり、火葬されたものもありました。玄室部の広い範囲から鉄釘が出土していることから、木製の棺があった可能性が推定されます。土器は1点のみ出土し、時期は9世紀前半頃と思われます。

速報！ 十五郎穴横穴

—未開口の横穴墓



館出第35号墓の位置図

この頭骨のみ、歯
が残っていました。

骨

頭骨



鉄釘の出土状況

火葬された骨

杯の中には灰が
入っていました。

頭骨

火葬された骨

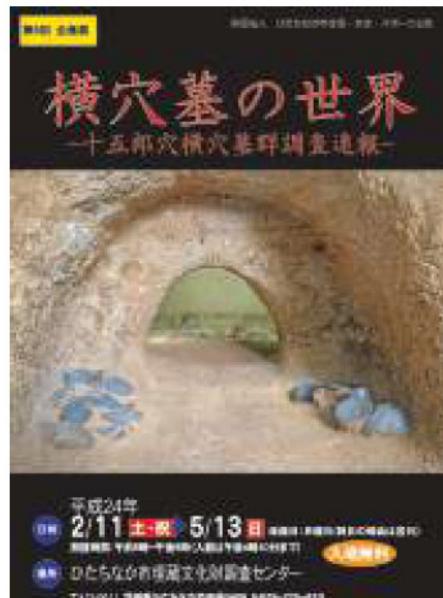
*玄室部の規模：奥行き 2m50cm, 奥壁幅 3 m 28cm, 前壁幅 2 m 50cm, 高さ最大 1 m 40cm

第9回企画展

横穴墓の世界

—十五郎穴横穴墓群調査速報—

2012年2月11日(土・祝)～5月13日(日)



今回の企画展では、館出第三五号墓から出土した遺物を速報として展示したほか、一九七六年から発掘調査が実施された指渕支群の出土遺物も公開しました。ここでは、館出第三五号墓から出土した主な遺物を紹介します。

土器 大量の須恵器が羨道部と墓前域から出土しました。接合作業をした結果、杯一八点、蓋五七個体であることがわかりました。一つの横穴墓からこれほど多くの土器が出土することは大変希な例です。須恵器の時期は八世紀後半と考えられます。これらの土器は、お墓の前で行われたオマツリで使用されたものと推定されます。

鉄製品 鉄製品では、大刀一口、刀子五口、鉄鎌一九点、鉄釘一四四点等が出土しました。大刀は長さ約五五cmで、手で握る部分が植物の蕨の形に似ていることから、「蕨手刀」と呼ばれているものです。蕨手刀は県内では二例目の出土になります。

刀子の中には、長さが約二五cmで、鞘尾金具や帶執金具などに金を施した大変豪華なものが出士しました。このような飾りのついた刀子が完全な状態で発掘された例はなく、類例は奈良県にあります正倉院に納められている刀子に求められます。このような正倉院のものと似た刀子が出土したことから、当横穴墓の被葬者がかなり高い身分であったことが推定されます。

(稻田健二)

出土した主な遺物を紹介します。

土器 大量の須恵器が羨道部と墓前域から出土しました。接合作業をした結果、杯一八点、蓋五七個体であることがわかりました。一つの横穴墓からこれほど多くの土器が出土することは大変希な例です。須恵器の時期は八世紀後半と考えられます。これらの土器は、お墓の前で行われたオマツリで使用されたものと推定されます。

鉄製品 鉄製品では、大刀一口、刀子五口、鉄鎌一九点、鉄釘一四四点等が出土しました。大刀は長さ約五五cmで、手で握る部分が植物の蕨の形に似ていることから、「蕨手刀」と呼ばれているものです。蕨手刀は県内では二例目の出土になります。

平成二十四年二月一八日から三月一〇日の毎週土曜日に、公開講座「ひたちなか市の考古学第五回 横穴墓の世界」を開催しました。講師には、四〇代の「若手」研究者をお招きして、最新の調査成果と研究成果をもとに、十五郎穴横穴墓群の謎に迫りました。

なお、今回の講座の内容については、後日、記録集を刊行する予定です。

公開講座「ひたちなか市の考古学」第五回

横穴墓の世界



月/日	演題	講師
2/18(土)	十五郎穴横穴墓群の調査	(財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 稻田 健一
2/25(土)	茨城県の横穴墓	日本考古学协会会员 生田目 和利 氏
3/3(土)	横穴と装飾付大刀	福島大学 菊地 芳朗 氏
3/10(土)	横穴墓が造られた時代	奈良国立博物館 吉澤 悟 氏



羨道部西側から出土した土器



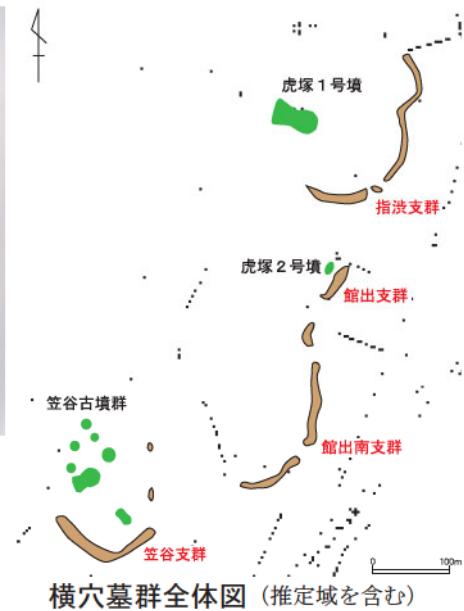
羨道部東側から出土した土器



羨道部西側土器出土状況



羨道部東側土器出土状況



横穴墓群全体図 (推定域を含む)



蕨手刀

(S=約 1/3)



刀子

(S=約 1/2)



奈良国立博物館
吉澤 悟氏



福島大学
菊地 芳朗氏



日本考古学協会員
生田目 和利氏

「追葬という一度造られたお墓に、後からつぎつぎと埋葬していく。それは、自分の祖先の所にあえて入っていくことだと思います。今回調査された横穴墓の追葬に、火葬の人骨があるということは、当時の那賀郡の中で最先端の文化を矜持できた人物が埋葬されているのではないかでしょうか。」

「横穴とは、各地の伝統的な上位階層の権力を解体するため、あるいは地域を直接的に支配する目的のために、6世紀代の中央政権が、その地域各地に存在する有力な家族や、新しく台頭してきた新興層といった人々を取り込んで、普及を図ったものと考えています。」

「虎塚古墳と十五郎穴横穴墓群の被葬者は、九州から移動してきた墓室を装飾するという独特的の埋葬儀礼を持った集団と、その支配下にある横穴墓という墓制を採用した複数の集団ではないかなと思います。」



二〇一一年度のひたちなか市内における発掘調査は、市内遺跡調査のか、十五郎穴横穴墓群の発掘調査・範囲確認調査、磯崎東古墳群の発掘調査がありました。市内遺跡調査では、三反田堀塚遺跡で古墳時代後期の住居跡が調査されました。十五郎穴横穴墓群では、館出支群35号墓の発掘調査が実施され、蕨手刀や金銅莊刀子、大量の須恵器など、多くの貴重な品が出土しました。磯崎東古墳群では、これまでよく知られていないかった小型の横穴式石室が調査され、今後の研究にとって貴重な成果となりました。（佐々木義則）

2011(平成23)年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	次数	所在地	月	種別	調査内容
1	金上向山遺跡	2次	金上	4月	試掘	溝7条、土坑3基を確認。土師器・須恵器・陶磁器が出土。
2	飯塚前遺跡	2次	三反田	6月	試掘	土坑1基を確認。縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器が出土。
3	西中根遺跡	3次	中根	6月	試掘	遺構なし。縄文土器・土師器・陶磁器・石器が出土。
4	三反田堀塚遺跡	3次	三反田	7月	本調査	住居跡1基（古墳後期）、土坑4基（江戸時代2基、時期不明2基）、溝2条（江戸時代以前1条、時期不明1条）を調査。縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・石製模造品・煙管・銅錢・陶磁器が出土。
5	三反田新堀遺跡	16次	三反田	8月	試掘	遺構・遺物なし。
6	磯崎東古墳群	8次	磯崎町	8月	試掘	石室4基、古墳1基（横穴式石室）を確認。須恵器が出土。
7	崩ノ原遺跡	2次	金上	12月	試掘	住居跡4基（時期不明）、溝跡5条を調査。土師器・須恵器・砥石が出土。
8	金上塙遺跡	7次	金上	12月	試掘	住居跡4基（9世紀1基、11世紀1基、時期不明2基）、溝跡4条を確認。須恵器・土師器が出土。
9	市毛下坪遺跡	10次	市毛	2月	試掘	住居跡3基（9世紀）、溝跡5条を調査。土師器・須恵器・砥石が出土。
10	小砂遺跡	3次	中根	3月	試掘	遺構・遺物なし。

歴史の小窓 その八

塩をつくった土器



ひたちなか市武田西塙遺跡からこの土器片は出土しました。粗雑なつくりや形、吹きこぼれの跡からみて、海水を煮つめて堅塩をつくるための製塩土器であろうと思われます。

古代において塩はさまざまな労働の給付物として用いられていました。もしかするとこの塩を受け取った村人は、労働提供の見返りとして村の有力者からもらつたのかかもしれません。『日本文徳天皇実録』の齊衡三年（八五六）の条には、鹿島郡に海水を煮て塩を作る者がいたことが記されています。この製塩土器は、そうした場所から運ばれてきたものかもしれません。塩はできたままの状態で製塩土器とともに産地から運ばれていたようですが、海辺でできた塩を碎いて土器や俵などに詰め替えて運んだ場合もあつたのではないかと想像しています。

とくにまとめて大量に運ぶには、俵などに詰めかえたほうが都合がよかつたのではないでしょうか。

（佐々木義則）

参考文献 津野仁「栃木県出土の古代製塩土器について」『研究紀要』第一四号 栃木生涯学習文化財团 二〇〇六、豊田市郷土資料館『塩の歴史と民俗』二〇〇九

ひたちなか市内の発掘調査 2011

おかだ

岡田遺跡のネズミ

岡田遺跡から出土した縄文時代早期の土器を整理していく中で、破片の表面に特徴的な傷跡を見出しました。傷跡は、土器の外側や内側だけでなく、断面にかかるものもあります。よく見てみると、平行する2本が単位で付けられた傷であったと推定することができます。その反復により表面が窪んでしまった部分も見られるのです。平行する2本の幅は2.0mm、長さは4.0mmから5.0mmの範囲のものが多いと計測されました。



同じような傷跡は、貝塚から出土した骨片にも観察されます。三反田蜆塚貝塚の骨片の傷跡と比較してみると、傷跡が付く位置や計測値がよく一致します。このような傷跡は、ネズミが齧った痕跡と考えられています。堅い物を齧る時にネズミは、上の門歯で物を固定し、下の門歯を前上方に押し出すようにします。下の門歯はかなり自由に開閉することから、齧った痕跡として2本の傷が付くことになります。ネズミが食物ではなくとも堅い物を齧るのは、門歯の伸び過ぎを調整する本能によるものと説明されています。

岡田遺跡の土器片については、当時に、土器が破片に分割し、地表面に露出した状態であったことまでが推定されます。ネズミを誘導したものが堅果類など植物の実であったなら遺跡が選地された環境条件を、動物の遺骸であったなら遺跡の調査地点には、貝殻の集積こそ見られないものの貝塚のような性格を思い描くことができそうです。

(鈴木素行)

みたんだいづか

三反田蜆塚遺跡の発掘調査

三反田蜆塚

遺跡は、ひたちなか市南部の三反田地区にある古代の集落遺跡です。遺跡に住宅が建つことになったため発掘調査を実施し、下のような古墳時代中期（5世紀末頃）の竪穴住居跡が1基調査されました。



住居跡は一辺7.2m、壁の高さ60cmもある大型の住居跡です。南壁には壁から外に張り出す深さ70cmの大きな穴が掘られていました。このような穴を持つ住居は、古墳時代の大型住居でときどき見られる構造です。村のなかでも特に有力な人の住まいであった可能性があります。



ところで、この住居跡からは、左のような不思議な土器が出土しました。高さ5cmほどの小さな土器ですが、その外側全体には、つぶした粘土粒がたくさん貼り付いています。いったいこの土器は何を表現しているのでしょうか。埋文センターでは動物説も飛びだしていますが、定かではありません。

今回の発掘調査では、埋蔵文化財調査センターの「ふるさと考古学」講座の受講生による体験発掘も実施されました。真夏の暑いなか、汗をかきながら竪穴住居跡を掘ってみた感想は、どうだったのだろう？

(佐々木義則)



震災被害への 対応

二〇一一年三月一日の東日本大震災では、当センターでも大きな被害に遭いました。標本陳列室では、壁面展示ケース内の遺物一五七点中五〇点が落下もしくは転倒して破損しました。中でも、茨城県指定文化財の東中根遺跡群の土器を含む、弥生時代の土器の被害が甚大でした。しかし、幸いにも「乳飲み児を抱く埴輪」などの、他の県指定文化財及び市指定文化財の破損はありませんでした。

復旧作業は、電気が復旧した三月一五日より開始しました。被災した遺物は、講座室へ移動し、順に復元作業をすることにしました。センターは、建物の安全が確認された四月一日から壁面展示がない状態で仮開館しました。仮開館中にも、破損した遺物の復元作業を続け、復元できたらものから順に展示をしていきました。その際には、今回の地震被害を教訓として、落下防止のアクリル板の設置等の対策を施しました。そして、大きな余震が収まってきた七月一日より、ほぼ震災前の状態の展示に戻すことができました。



アクリル板を設置した新しい展示状況



被災した弥生土器（2011年3月15日撮影）



先生、大塚初重先生（2011.11.6）



茨城県鹿嶋市 大塚・木戸横穴墓群

糸川 崇

(鹿嶋市教育委員会)

鹿嶋市は、かつては常陸国一之宮である鹿島神宮の門前町として栄え、徳川家康、秀忠二代将軍が建てた本殿が国の重要文化財に指定されている。自然にも恵まれた地域であり、旧石器時代から縄文時代、古代に至るまで多くの時代の遺跡が存在する地域である。鹿嶋市内で確認されている古墳は約四五〇基、横穴墓群は大塚辺田で二〇基、木戸で六基確認されている。

大塚辺田横穴墓群は市内のほぼ中央部、茨城県内最大規模の宮中野古墳群の存在する台地の西側、北浦の崖に構築されたもので、下方の沖積地には前方後円墳や円墳からなる珍しい低地型の爪木古墳群が形成されている。横穴墓は土取り工事中の発見であり、調査の詳細については『鹿島町史第一巻』に記載されているものを参照するしかないが、成田層と呼ばれる砂岩層の西側緩斜面に横列二段に並べて掘った素掘りの横穴墓に死者を埋葬したものと思われる。中

には天井の構造がアーチ型で奥壁に軒や柱と思われる線刻や間仕切りが見られるものもあり、当時の葬送観念の表れと見ることが出来る。台地上の古墳群は五世紀から七世紀に形成された墓地であり、横穴墓は七世紀の後半以降に形成されたもので、台地上の古墳の造営時期と一部重なる。

木戸横穴墓群は鹿島台地の最南端の崖に確認されており、地滑りによるがけ崩れで偶然発見されたり立つた崖の上層部で成田層と思われる砂岩層に構築されたものである。記録された図面では斜面に掘った横穴墓に死者や副葬品を木棺等に入れて埋葬したものと考えられる。

木戸横穴墓群は鹿島台地の最南端の崖に確認されており、地滑りによるがけ崩れで偶然発見されたり立つた崖の上層部で成田層と思われる砂岩層に構築されたものである。記録された図面では斜面に掘った横穴墓に死者や副葬品を木棺等に入れて埋葬したものと考えられる。



横穴墓の位置（丸囲み部分）



大塚辺田横穴墓群の写真

家族と思われる人骨数体（五〇代の男女各一体、三〇代の男女各一体と幼児骨）が確認されおり、副葬品については直刀の他、東海地方湖西産の横瓶や長頸瓶、長頸壺、須恵器の壺や台付皿、短頸壺等が出土したことが記録されている。

明治の初め頃には日本には多くの諸外国人が訪れているが、此の地にも英國の宣教師が鹿島を訪れている。その頃、地滑りで崖が崩れて横穴が出現、中から人骨と刀が出土して「鹿島氏の家来の墓であろう」と、警察に届けたことが記録に残されている。この地区には鹿島の総追捕使の屋敷跡や墓地などもあることから、鹿島城に関係するものと推測したのであろうか。いずれにしても外國の宣教師が明治の初め頃に鹿島を訪れていたこと、しかも鹿島の歴史に造詣が深いことが想定される記録であり、横穴の研究史と相まって明治の初めに鹿島を訪れた外国人が、いかなる人物であったのか興味が持たれるところである。

田彦中学区編)



田彦古墳群は、前方後円墳 1 基と円墳 21 基からなる古墳群ですが、現在は数基が残るのみです。写真の埴輪は、前方後円墳から出土したものと思われます。埴輪は武人埴輪で、頭には冑を被り、顔や体には青色の顔料が見られます。



(原寸大)

東石川新堀遺跡の土器には、粘土の紐を貼り付けたような文様が見られるだけで、これは「隆起線文土器」と呼ばれています。14000～15000年前に男体山から噴出した今市・七本桜テフラが堆積する土層の上部で検出されました。



東石川十文字遺跡からは、「田戸下層式」という縄文時代早期の土器が多量に出土しました。全て破片ですが、およそその文様構成を復元できるものもあります。底部が尖り「尖底土器」と呼ばれる土器の1つです。

大島中学区には10の遺跡が、田彦中学区には16の遺跡がみつかっています。主な遺跡には、縄文時代の東石川新堀遺跡や東石川十文字遺跡、古墳時代の松原遺跡や根崎A遺跡、田彦古墳群などがあります。

遺跡の発掘調査は1980年代から行われており、2010年までに17回実施されています。縄文時代の東石川新堀遺跡では、縄文時代の最も古い草創期の土器が出土しました。土器は口縁部や胴の上部に粘土帯を巡らす「隆起線文土器」と呼ばれるもので、土器の始まりを知る上で貴重なものです。東石川十文字遺跡では、縄文時代早期の「田戸下層式土器」が出土しています。松原遺跡や根崎A遺跡では、古墳時代前期のムラの跡が見つかっています。田彦古墳群では本格的な調査が実施されていませんが、前方後円墳から武人の埴輪が出土しています。

2011年までに発掘調査された住居跡の数
大島中地区：1基 田彦中地区：7基
合計：8基

2011年までに発掘調査された遺跡（地図上の●印）
大島中地区：東石川遺跡、東石川新堀遺跡、向山遺跡、外野遺跡、屋敷内遺跡、東石川十文字遺跡
田彦中地区：松原遺跡、根崎A遺跡、雷土B遺跡

ひたちなか市の遺跡9（大島・田彦）



大塚先生から明治大学と勝田市の共同調査が提案され、その橋渡しとして何回か市教育委員会と協議を持った。その折に住宅団地の計画を知り都市計画課に話し合いに行くと、すぐに市長室に案内された。その後大塚先生を交えて安市長と話し合いがもたれ遺跡の保存の方向が固まつていったのである。発掘調査の計画はトントン拍子に進んだ。私は地主探しに奔走した。付近の耕作者から馬渡の○○さんと教えられ、

お訪ねすると日立市諏訪町の○○さんに売却したという。日立市諏訪町には明治大学の同級生で日本史専攻の久賀谷晃一君がいた。久賀谷君を訪ねて聞くと、諏訪町にはそんな人はいないという。そういう場合は日製の諏訪寮を訪ねるといいと聞き、久賀谷君と一緒に諏訪寮に行くとその人がいた。事情を話して遺跡発掘承諾書をその場でもらい調査の段取りを整えていったのである。こうして馬渡の調査が開始されたのであった。そして市史編纂に結び付いていくことになる。

市史編纂の基本——資料の徹底的涉獵

勝田市

史編纂の考古関係の部会には大塚初重先生、志田諄一先生がおられた。志田先生は私の高校、大学の先輩であった。大塚先生から最初に方向が示された。発掘については東中根遺跡、虎塚古墳が対象に挙げられた。また市内の遺跡の分布・収蔵遺物については徹底的に調査することが基本とされた。市史編纂がはじまつて間もなく鴨志田篤二さんが教育委員会に赴任され、協力を得られることとなり調査は大きく前進していった。調査には明治大学考古学専攻の学生と茨城キリスト教大学の「常陸国研究会」の学生が参加されるようになつた。遺跡の分布調査は年次計画で市域全体について行なつた。今日の遺跡地図及び地名表はこの時の調査を基本にしている。また、遺物調査は当時中央公民館の資料室に厖大な考古資料が収蔵されていたので、そ



1966(昭和41)年の馬渡埴輪製作遺跡第2次調査
後列右端が川崎



川崎 純徳

彼らの写真撮影や拓本、実測等の資料化を実施していった。さらに市内の収蔵者の資料もお借りして資料化を進めていくこととなつた。

分布調査での事件

分布調査は調査員の学生を中心にしてローラー作戦で展開した。採集遺物は採集袋に地点を記入し、地図上に落として行く。三反田の飯塚前でブルドーザーによつて整地作業が行われている現場に遭遇した。古墳があり墳丘の裾が掘削されていた。思わず私はブルドーザーの前に大手を広げて立ちはだかり工事にストップをかけた。作業中のオペレーターは重機から降りてきて、いざこぎになつた。事情を話してしばしの工事の中止を求めたところ「あんたら掘りたいんだろう」という。急遽、市の関係者の来跡を求めて話し合いがもたれ、工事は中止されることになり後日、この古墳が市指定史跡第一号となつた飯塚前古墳である。県内でも類例の少ない長方墳であることが判明したのである。貴重な遺跡を守ることも市史編纂の大切な仕事なのである。

市史編纂事業の終結にあたつて編纂委員会から勝田市長あて博物館建設の要望書を提出したのは資料の散逸を危惧し、さらに将来の活用を期待したからである。編纂された市史はその時点での記述であり、将来の資料解釈や評価のためにも市史編纂に使用した資料は、公的機関に保管しておくべきものなのである。博物館建設の委員会が設置され何回か委員会が開かれたが、いつの間にかうやむやに終わつた。私は市立博物館の考古資料収蔵部門として「埋蔵文化財調査センター」の設置を提案した。博物館は、まだ残念ながら実現していない。その当時でさえ一〇万都市で博物館を持たないのは全国一〇市に満たない。博物館構想はうやむやとなり、埋蔵文化財調査センターだけが設立された。

自治体史編纂と資料の保管 自治体史の編纂は多くの貴重な資料を発掘する。これは考古資料に限らず古文書や民俗資料についても同様である。しかし編纂事業が終わると貴重な古文書等の資料は所有者に返還され散逸してしまうケースが多い。本来自治体史は資料集編纂が主軸であるべきものであるが、多くは通史であり、そのための資料収集に終わつていい。貴重な文

歴史は決して過去にあるのではなく、それぞれの生活文化は地域独自の歴史を生み出し、成長し、やがて死滅する。そして新しい歴史や文化を生み出していく有機体として継承されていかなければならない。その拠点は博物館である。

昨年末に志田諒一先生の訃報に接した。最初に思ひ出るのは志田先生と滝田宏先生からの要請で高萩市赤浜古墳群の発掘調査を行つたことである。発掘に先立つて現地を踏査し、その折に先土器時代の石器が採集された。その包蔵地調査も課題となり、本県で初めて先土器時代の遺跡の調査に成功した。このことは本県の考古学研究史の上でも大きな出来事であった。先生との思い出は限りなく多い。市史編纂だけでなく、『茨城県史』の編纂や勝田市その後のひたちなか市の文化財保護審議会委員としてもご一緒した。文化財保護では大平古墳の問題があつた。農協の倉庫建設で、古墳の事前調査が市から提案された。勝田市文化財調査委員会は、何回かの市の要請を拒み一貫して保存の方針を貫いたことがある。全会一致で保存を貫き通すことが出来たのは志田先生のご尽力も大きかつたのである。これを契機として文化財調査委員会は解消して勝田市文化財審議会が誕生した。このように先生は本県における歴史研究の第一人者であつただけでなく文化財保護の面でも大きな足跡を残されたのである。訃報に接して感慨ひとしおのものがある。ただただご冥福をお祈りするのみである。

「霞ヶ浦の製塩土器」二〇一一年度の遺跡めぐりの参考として、同じ霞ヶ浦沿岸に位置する広畠貝塚と道成寺貝塚の土器を展示しました。現在の霞ヶ浦一帯は、貝塚が形成されていた縄文早期から晩期には、縄文海進により古鬼怒湾と呼ばれる海の入江でした。霞ヶ浦の貝塚が千葉県にある東京湾岸の貝塚と違う点は、「製塩土器」が出土する貝塚が多くあることです。広畠貝塚や道成寺貝塚、上高津貝塚からも、たくさんの中の製塩土器が出土しています。「製塩土器」は塩を作る過程で専用に使われたと考えられる土器です。縄文土器といえば、装飾的で緻密に作られているものと思い浮かべる方が多いと思います。多くの器種があるこれらが精製土器。それには劣りますが、深鉢形を主流として文様を施された粗製土器があります。「製塩土器」は、これらとは違い、厚みが二～四ミリと非常に薄く文様が全くなく、ヘラなどできりっぱなし

の土器です。センターが収蔵している広畠貝塚と道成寺貝塚の土器から、三種類の土器を展示して、違いを実感できるようにしました。



最初に訪問した上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館では、貝塚の成り立ちから古墳時代のみずらまで展示に沿った解説をしていただきました。展示資料の中には、広畠貝塚の製塩炉の炉壁の一部も展示されていました。貝層断面の展示施設では、どのくらいの年月を重ねて積つたのかと思うほど厚さの貝層を間近で見ることができました。

次の陸平貝塚公園では美浦村文化財センターで昼食をとり、展示遺物の説明を受けた後、陸平貝塚を見学に行きました。坂道を登った先にある丘上は、広く見渡せる場所になっていました。この周りの斜面に大小八つの貝塚があり、このうちA貝塚とD貝塚を通る木道を歩きました。道の両側には木の葉の間からハマグリやアカニシなどの貝殻がたくさん見られました。見学のあと、ボランティアグループ「陸平をヨイショする会」の皆さん指導のもと、見本を参考に思い思いの形をした土笛を作ることができました。

(菊池順子)

復元された縄文時代の植生と竪穴住居（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）



土笛を作る参加者（美浦村文化財センターにて）



上高津貝塚の展望デッキで説明を受ける



焼きあがった土笛の一部

*「霞ヶ浦の製塩土器」ポスターの作成には、上高津貝塚ふるさと歴史の広場より、製塩土器の写真をご提供いただきました。

「武田式」と「小祝式」、それぞれの紡錘車

鈴木 素行



弥生時代後期の土器「十王台式」は、那珂川流域以南と久慈川流域以北の地域で文様等の特徴が異なり、これを「武田式」と「小祝式」と名付けて分別しています。糸に燃りをかけるための土製紡錘車にも、同じような文様の構成でありながら、異なる施文具を使用したものが「武田式」と「小祝式」、それぞれの地域を中心に分布します。

1 はじめに

「十王台式」と一括りにされてきた弥生時代後期の時期と地域について、ひたちなか市の武田遺跡群と船窪遺跡群の調査により、その構造を解明するための糸口がつかめてきた。本稿では、「十王台式」の地域的な細別の一部を紹介し、それぞれの細別型式に伴う特徴的な紡錘車を抽出するとともに、表徴とした文様を施文する工具についても言及しておきたい。

2 「武田式」と「小祝式」

茨城県北部を中心に分布する弥生時代後期の「十王台式」には、主に中型の壺形土器の製作と施文に観察された特徴の異なりから、地域的な細別を認めている。その後半期の細別には、那珂川流域以南に「武田式」、久慈川流域以北に「小祝式」の名称を付与した〔鈴木二〇〇〕。

「武田式」の中・小型の壺形土器は、胴上部の櫛描文下端の横区画が波状文、充填波状文の縦区画が三条を典型とする。口唇部を笠状工具で刻み、口唇上に突起が貼付されることも少なくてない。底面に、布目痕が残ることも大きな特徴である。

「小祝式」の中・小型の壺形土器は、胴上部の櫛描文下端の横区画が直状文か連弧文、充填波状文の縦区画が二条を典型とする。口唇部を繩文原体で刻み、口唇上に突起が貼付されることはほとんどない。底面には、砂痕が残るか、撫で調整が施されていることも大きな特徴である。

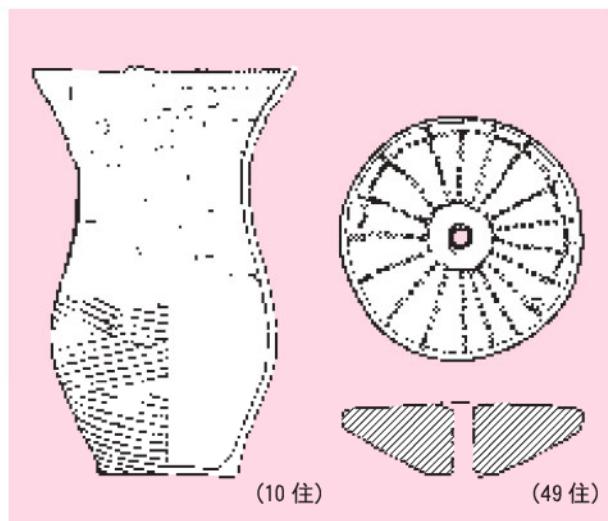
久慈川流域以北の地域では、阿武隈山地の南

端部、通称多賀山地に、花崗岩・花崗閃綠岩・角閃片麻岩・黒雲母片麻岩・黒雲母片岩等の、黒雲母の供給源となる岩石の堆積があり、供給源からの距離が近いことにより、胎土を構成する粘土や砂粒には、これが風化して金色に発色した所謂「金雲母」が含まれることが多い。武田遺跡群と船窪遺跡群でも、「武田式」に伴い出土した「小祝式」には金雲母が含まれており、これらは久慈川流域以北から那珂川下流域へ搬入されたものと識別できる。したがって、「武田式」「小祝式」細別の発現は、二つの地域の交渉が途絶えたことによるのではない。間隔をあけて分割された縦区画内に波状文が充填される胴上部、付加条原体が交互に施文される羽状縄文の胴下部という、「十王台式」を規定する文様構成を共有しながらも、異なる属性が意識的に組み込まれているのである。

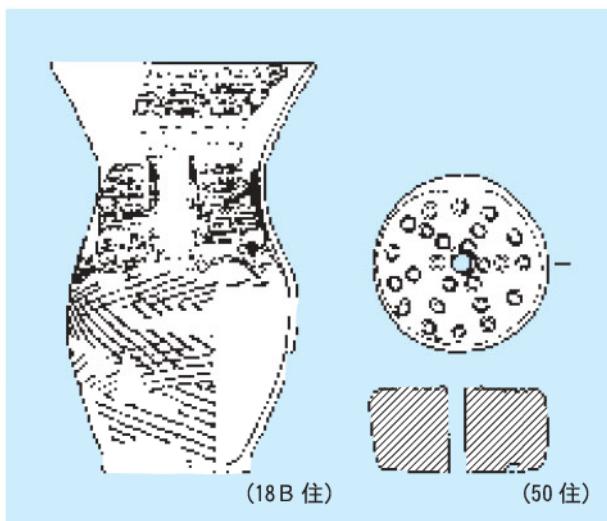
3 「半分山型」の紡錘車

船窪遺跡群の半分山遺跡において六点が検出された、特徴的な形態と文様の土製紡錘車に対しては、「半分山型」の名称を付与してある〔鈴木ほか二〇〇四〕。形態は、上面と下面の直径の差が大きい逆台形の断面形状を典型として、最大径がほぼ中央に位置して菱形に近い断面形状を呈するものもある。文様は、細い植物の茎を刺突して、上面に放射状文が施され、その条端部を結ぶようにして外縁付近に円文が構成される。逆台形の形態では、上面に布目痕を残すものもある。

「半分山型」の類例を検索してみると、半分



1. 「武田式」と「半分山型」



2. 「小祝式」と「北久保型」

図1 半分山遺跡から出土した土器と紡錘車（土器の縮尺1/4、紡錘車の縮尺1/2）

山遺跡の他にもひたちなか市の鷹ノ巣遺跡に二点、堀口遺跡に一点、東海村下ノ諏訪南遺跡に一点、大洗町一本松遺跡「井上ほか二〇〇一」に一点、茨城町の大戸下郷遺跡「綿引・松本二〇〇六」に一点、宮後遺跡「川又ほか二〇〇五」に一点があり、合計一三点を確認することができた（鈴木二〇一二）に追加）。これらの遺跡は、那珂川流域以南を中心として分布する。平面形の直径（長軸）は、最小が四九mm、最大が七〇mmで、一点の平均値は六〇・五mmほどと算出される。放射状文の条数は、最多が二二条、最少が九条で、一六、一八条が典型となろう。刺突文の直径（長軸）は、一・〇mm前後である。観察できた紡錘車の全ての胎土に、金雲母は認められない。

「半分山型」は、その時期と分布から、「武田式」に伴う紡錘車と捉えられる（図1の1）。胎土が土器と比較して異質でないこと、「武田式」の典型的な底面痕跡である布目痕が見られることも、これを支持している。

4 「北久保型」の紡錘車

半分山遺跡からは、「半分山型」を規定した文様を構成しながら、刺突文の大きさが著しく異なる土製紡錘車も出土している。まずは、半分山遺跡とともに、福島県いわき市朝日長者遺跡「鈴木（重）一九八二」、高萩市北久保遺跡「志田ほか一九六九」、那珂市岡田台遺跡の四点の資料について計測と観察を報告する。

半分山遺跡（図1の2） 直径（長軸）四七mm、厚さ二三mm。長方形に近い断面形状を呈する。放射状文は六条で、刺突文は長軸三・九mm

点、堀口遺跡に一点、東海村下ノ諏訪南遺跡に一点、大洗町一本松遺跡「井上ほか二〇〇一」に一点、茨城町の大戸下郷遺跡「綿引・松本二〇〇六」に一点、宮後遺跡「川又ほか二〇〇五」に一点があり、合計一三点を確認することができた（鈴木二〇一二）に追加）。これらの遺跡は、那珂川流域以南を中心として分布する。平面形の直径（長軸）は、最小が四九mm、最大が七〇mmで、一点の平均値は六〇・五mmほどと算出される。放射状文の条数は、最多が二二条、最少が九条で、一六、一八条が典型となろう。刺突文の直径（長軸）は、一・〇mm前後である。観察できた紡錘車の全ての胎土に、金雲母は認められない。

「半分山型」は、その時期と分布から、「武田式」に伴う紡錘車と捉えられる（図1の1）。胎土が土器と比較して異質でないこと、「武田式」の典型的な底面痕跡である布目痕が見られることも、これを支持している。

短軸三・〇mmの橢円形である。胎土に大量の金雲母を含む。

朝日長者遺跡（図2の1） 直径四六mm、厚さ一四mm。長方形でも板状に扁平な断面形状を呈する。放射状文は六条で、刺突文は長軸三・七mm短軸三・五mmの橢円形である。胎土に大量の金雲母を含む。

岡田台遺跡（図2の3） 直径（長軸）五〇mm、厚さ一九mm。菱形に近い断面形状を呈する。放射状文は四条で、刺突文は直径四・五mmの円形である。胎土に大量の金雲母を含む。

平面形の直径（長軸）は、六〇mmを上回らず、五〇mm前後のものが多い。形態は、断面形状に四つの類があり、典型を絞り込むことは難しい。「半分山型」との比較では、長方形の断面形状の存在が特徴となる。文様は、上面に放射状文が施され、その条端部を結ぶようにして外縁付近に円文が構成されることと同じでも、その刺突を施文する植物の茎が、「半分山型」の三倍以上の直径であることに特徴を認める。太い施文具によるためか、放射状文の条数は「半分山型」の三分の一以下と少ない。このような属性を表徴とする土製紡錘車に対しては、最初に報告された北久保遺跡に因み、「北久保型」と呼称しておきたい。

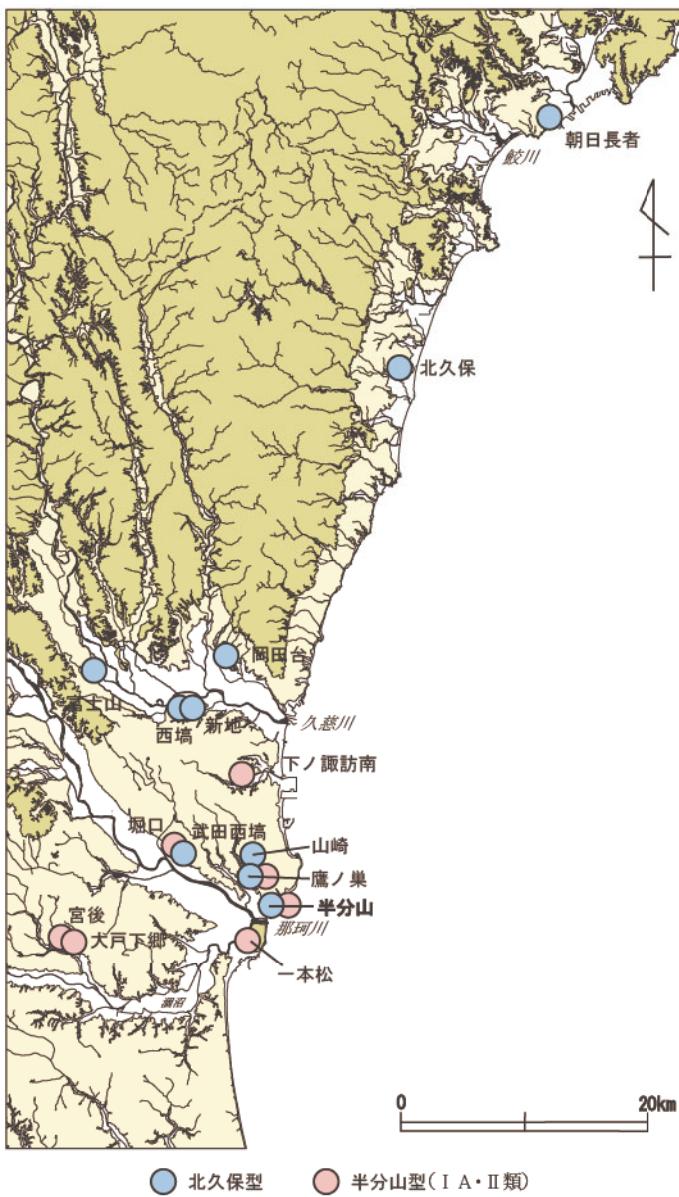


図3 「北久保型」と「半分山型」の分布

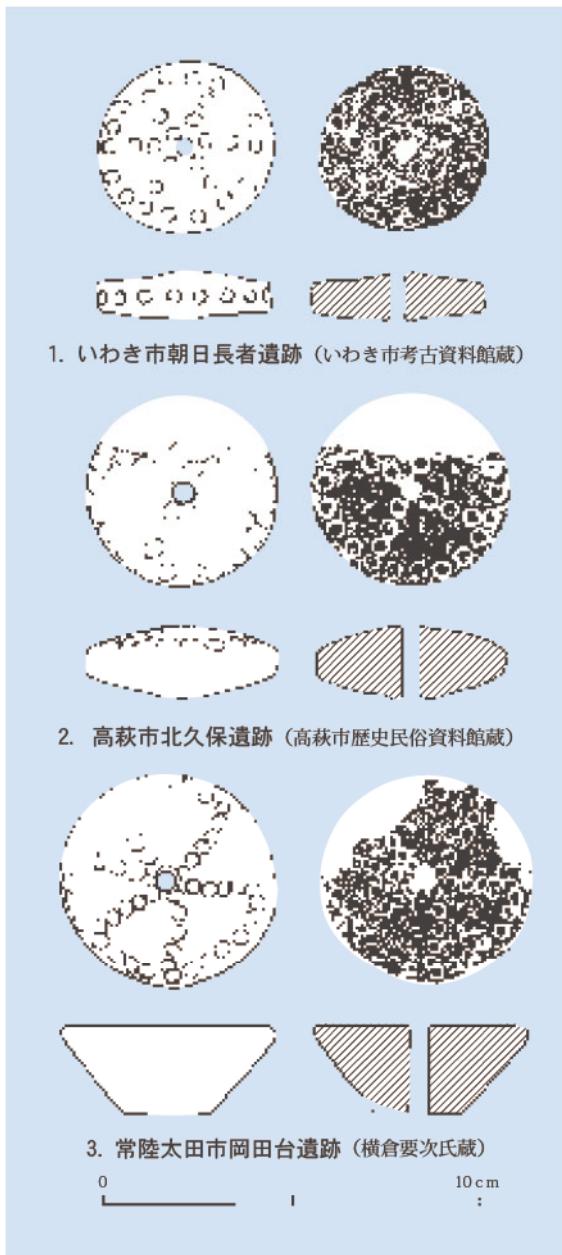


図2 「北久保型」の類例

「北久保型」の類例を検索してみると、他にも常陸大宮市富士山遺跡「井上ほか一九七九」、那珂市の西塙（森戸）遺跡「川崎ほか一九九〇」と新地遺跡「川崎・渡辺一九七二」など、久慈川流域に多く見られる。「北久保型」は、その時期と分布から、「小祝式」に伴う紡錘車と捉えられる。本稿で報告した四点の胎土に大量の金雲母を含むことも、「小祝式」の特徴と一致している。半分山遺跡や、ひたちなか市の武田西塙遺跡「鈴木ほか一〇〇二」、山崎遺跡「井上一九九〇」、鷹ノ巣遺跡「色川ほか一〇〇八」など、那珂川流域への分布の広がりは、久慈川流域以北との交流に起因したものと考えられるのである（図3）。

5 紡錘車の施文具

「半分山型」「北久保型」の紡錘車の施文具について、「植物の茎」と表記してきたのは、個々の刺突文に微妙な形状の変化が観察され、鳥類の管骨など硬質の素材を候補から除外できたことによる。中空の茎を有する植物の代表はイネ科であり、「竹管状工具」などと形容されるタケ（竹）もイネ科タケ亞科に分類されている。

「武田式」の地域では、半分山遺跡において住居跡の炉址内や土器内の土壤を水洗選別した結果、多くの住居跡から炭化した状態でイネの種実つまりコメが検出されている。また、第一六号住居跡の土器内ではコムギの種実が一点、第五六号住居跡の炉址内ではオオムギの種実が一点点同定されている「パリノ・サーザイエイ株式会社二〇〇五）。

「小祝式」の地域では、日立市十王台南遺跡

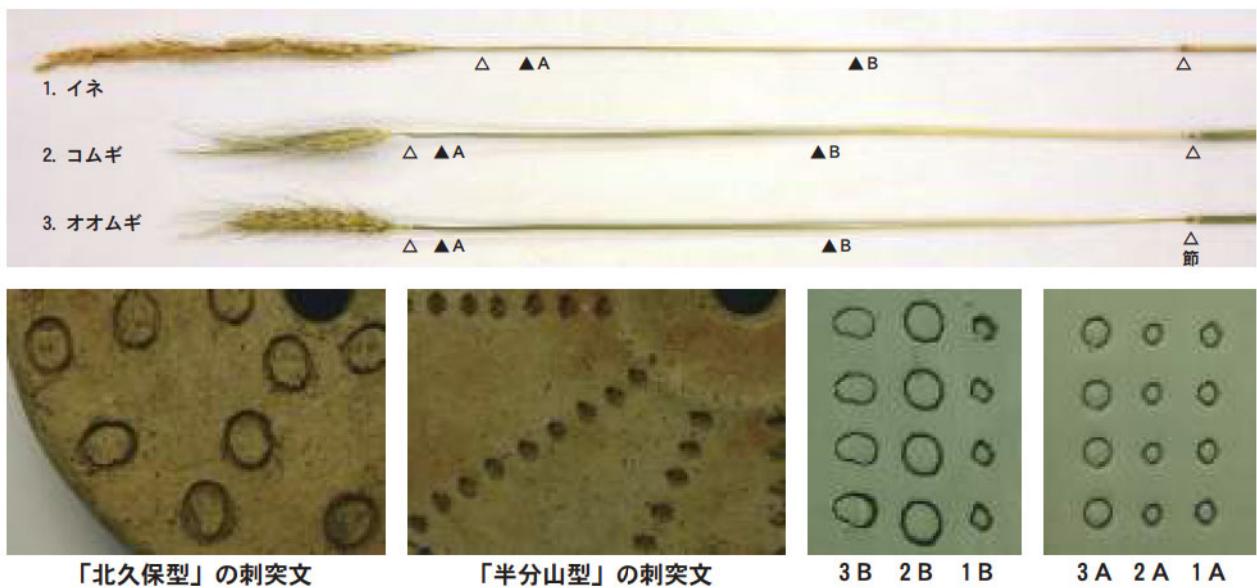


図4 刺突文の施工実験 (刺突文の倍率は2倍)

検出されたのは種実であっても、これらは栽培植物であり、「十王台式」の地域における農耕の収穫物と推定される。したがって、その茎を利用することもできたと、想定して良い。そこで、現生のイネ（図4の1）、コムギ（2）、オオムギ（3）の茎による施文を実験することにした。実験に使用した茎の部位は、節を目安として、穂首の節から一〇畝ほど下の位置（A）、次の節との間に相当する位置（B）の二つである。その結果、Aの部位で刺突したイネ（A）とコムギ（2A）の茎の圧痕は「半分山型」の刺突文に、Bの部位で刺突したコムギ（2B）とオオムギ（3B）の茎の圧痕は「北久保型」の刺突文に、それぞれ形状と大きさが良く似ていることが捉えられた。コムギとオオムギはAとBの部位では大きさが変わり、イネは、その大きさをほとんど変えていない。

実験による類似は認めて、それぞれを同定するには至らない。繩文時代後期の土偶にも同じような刺突文を見ることから、あくまで弥生時代の紡錘車に限定し、形容であること強調しながら「稻茎（とうけい）状工具」と「麦茎（ばっけい）状工具」という呼称を、今後の研究のために準備しておきたい。「半分山型」の紡錘車は稻茎状工具、「北久保型」の紡錘車は麦茎状工具により刺突文が施されている。異なりは、その地域で入手できる施文具に規制され

において第一号住居跡の土壤を水洗選別した結果、イネとオオムギの種実が検出されている「鈴木・松谷・片平一九九九」。

検出されたのは種実であっても、これらは栽培植物であり、「十王台式」の地域における農耕の収穫物と推定される。したがって、その茎を利用することもできたと、想定して良い。そこで、現生のイネ（図4の1）、コムギ（2）、オオムギ（3）の茎による施文を実験することにした。実験に使用した茎の部位は、節を目安として、穂首の節から一〇畝ほど下の位置（A）、次の節との間に相当する位置（B）の二つである。その結果、Aの部位で刺突したイネ（A）とコムギ（2A）の茎の圧痕は「半分山型」の刺突文に、Bの部位で刺突したコムギ（2B）とオオムギ（3B）の茎の圧痕は「北久保型」の刺突文に、それぞれ形状と大きさが良く似ていることが捉えられた。コムギとオオムギはAとBの部位では大きさが変わり、イネは、その大きさをほとんど変えていない。

- 主要参考文献**
- 史』上 高萩市役所／鈴木重美一九八一『朝日長者遺跡 夕日長者遺跡』(いわき市報告第六冊) / 鈴木素行・松谷暁子・片平雅俊一九九九「十王台のコメ」『十王町民俗資料館紀要』八／鈴木素行二〇〇一「武田西塙遺跡における十王台式土器の分析』『武田西塙遺跡 旧石器・繩文・弥生時代編』(公社報告第二集) / 鈴木素行ほか二〇〇四『半分山遺跡』(公社報告第三〇集) / 鈴木素行二〇一一「富士山のイモガイ」『茨城県考古学協会誌』第三三号／パリノ・サーヴェイ株式会社「船窪遺跡』(公社報告第三二集)

たのではなく、「武田式」「小祝式」の細別に見たように、文様構成を共有しながらも、異なる属性が意識的に組み込まれたことによると考えられるのである。

6 おわりに

「武田式」には「半分山型」の紡錘車、「小祝式」には「北久保型」の紡錘車が、それぞれ伴うことを示した。但し、これは現象を最も単純化した説明に過ぎず、那珂川流域における「北久保型」の製作について、本稿では省略している。稻茎状工具、麦茎状工具により施文され「半分山型」「北久保型」とは異なる文様を構成する土製紡錘車もあり、また、「武田式」「小祝式」に伴う紡錘車は「半分山型」「北久保型」だけでもない。土製紡錘車の型式論は、今後に開拓を待つ研究領域である。

埋文センターの日々 後期 2011



虎塚古墳
花便り

88 ハナシ

10月
1.ふるやまと考古学⑦「那珂川の考古学」(講師・濱田篤信氏)→



城県立歴史館より資料返却【沼谷津遺跡出土木製品】→ 21茨城県つくば美術館「櫻戸庄衛展」へ資料貸出【井上コレクション埴輪ほか】→



虎塚古墳壁画公開→ 10東海村立照沼小学校6年生社会科見学→ 松戸市博物館友の会見学→ 14虎塚古墳石室点検→ 15枝川小学校4年生社会科見学→ 文化庁茨城県史跡被災調査→ 18大貫 静夫氏(東京大学大学院教授)・オクサナ氏(ロシア・ビヨートル大帝博物館研究員)資料見学【後野遺跡土器ほか】→

虎塚古墳の春の壁画公開が終了し、周辺に静寂がもじり四月中旬、石室入口前の「ハナシの花」が満開となりました。この由来は、つぼみが子むわのいわうじぶんに似ているからとか、実が「ハナシ」としてつかひなむの説があります。昔は、「ハナシ」が咲くのを田畠じこで田植えを始めたじかひ、「田打ち桜(たづねざくら)」と呼ばれていました。

「ハナシ」といえば、北国の春の情景を描いた有名な歌が思ひ出されます。一説によると、歌の舞台は長野県であるといわれますが、

昨年の大震災で風景が一変してしまった東北を見た私は、歌詞にあるような美しい春の情景が

一日でも早く、みがえること、を、この花を見ぬ思わずにはいられません。
(稻田健一)



12十五郎穴横穴墓群試掘調査・

内空気の成分調査→ 2田中優起氏(国学院大学学生)資料見学【遠原貝塚石匙ほか】→ 3-6虎塚古墳壁画公開→ 4我孫子市史研究センター見学→ 阿字ヶ浦小学校6年生虎塚壁画見学→

20ふるやまと考古学⑪「ワイヤーピン探検」(講師・矢野徳也氏)→

磯崎東古墳群本調査開始→

授業[見たい・知りたい・わたしたちの町ひたちなか]→ 15ふるやまと考古学⑨「貝の考古学」(講師・黒住耐一氏)→ 16東石川小学校クラス会見学→ 駅からウォーキング見学→ 18茨

24島ノ原遺跡試掘調査開始→

24島ノ原遺跡試掘調査開始→

栃木県立博物館企画展「土偶の世界」より資料返却／30 金上塙遺跡

試掘調査開始／佐野中学校2年生職場体験／郷土歴史研究会

12月 佐野中学校2年生職場体験／4

ふるさと考古学⑫「やっぱり楽しい考古学」(講師・さかいひろい氏)



博物館)資料調査【差遣遺跡オオツタノハ貝輸】／31 第4回記録集『古代の鉄生産』発行

博物館)資料調査【差遣遺跡オオツタノハ貝輸】／31 第4回記録集『古代の鉄生産』発行



2月

8十五郎穴横穴墓群調査成果記者発表／10震災破損資料修復終了／11第9回企画展「横穴墓の世界」開始／十五郎穴横穴墓群発掘現地説明会(参加人数485名)



12月 金上塙遺跡試掘調査終了／8畠

ノ原遺跡試掘調査終了／茨城県つ

くば美術館より資料返却／14遺

跡めぐり／20近藤庄司氏資料見

学(鉢)宮古墳群石棺

1月

7川又清明氏(茨城県立歴史館)資料調査[広縁貝塚骨角器ほか]／9坂口隆氏(南

山大学)資料見学(天田房貝塚注口土器ほか)

／11郷土歴史研究会／12勝田第三中学校職場体験打合せ／15ワ

ンケースミュージアム22「霞ヶ浦の製塩土器」終了／20・24勝田第三中学校2年生職場体験／25郷

土歴史研究会／高橋健氏(横浜市歴史化米)／茨城県文化財巡回報告／

14-15市毛下坪遺跡試掘調査／18

公開講座①「十五郎穴横穴墓群の

調査」(講師・稻田健一)／25公

開講座②「茨城県の横穴墓」(講師・

生田目和利氏)

3月 公開講座③「横穴と装飾付大刀」

(講師・菊地芳朗氏)／6十五郎穴

横穴墓群本調査終了／10公開講

座④「横穴墓が造られた時代」

(講師・吉澤悟氏)／16『平成23年

度市内遺跡発掘調査報告書』発行

／横浜市歴史博物館企画展「海に

こぎ出せ! 弥生人」へ資料貸出(差渡

遺跡オオツタノハ貝製輪ほか)／21磯崎東

古墳群本調査終了／21・22小砂遺

跡試掘調査／23十五郎穴横穴墓

群試掘調査終了／24茨城県建築

士会見学／29-31虎塚古墳壁画公

開／31『埋文だより』第36号発行

ひたちなか埋文だより 第36号

発行 ひたちなか市理藏文化財調査センター

ひたちなか埋文だより 第36号
編集 財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2012年3月31日発行
発行 ひたちなか市理藏文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

編集後記の 笑つ埴輪



三反田小学校の五年生が、校庭で拾ったものを持ち寄ってくれた。三反田小学校の敷地は、三反田遺跡という名前で、校舎の整備に伴い五次にわたり発掘調査が実施されてきている。古墳時代前期の集落跡が遺跡を代表するが、縄文時代前期の土器も出土していたはずだと思い出しながら見せてもらうと、ビニール袋に入れられていたのは、そのいずれでもなかった。表面の一部に文様を持つ成形した樹脂の破片で、現代の製品のようだ。

他の職員に訊いてみると「わからない」というコメントを添えて返却することになつた。彼は、それが何であるのか、探求を続けただろうか。「ふるさと考古学」では、「知りたいことが、他人に訊いても、本を見ても、インターネットでも検索できない時はどうするか」という問を発してみたことがある。模範解答は「自分で調べる」であつたが、「あきらめる」という答えが元気よく返ってきた。本当に知りたいのなら、自分で調べもせずに諦めるのは早すぎるだろう。「わかること」の悦びがある。藤本弥城宛の葉書に、晩年の山内清男は書いている。

「あきらめないと、その先に待っているのだから。ただ、調べるのにかかることがある。藤本弥城宛の葉書に、晩年の山内清男は書いている。



(2012.1.15)

